はしがき

本書は、古文解釈に必要な基礎力を短期間に、しかも能率的に整理し、さらに応用力を養成することを目標にして編んだものです。

まず、上段の基礎的事項を理解し、下段の《基本練習》を確実に試みてください。できるだけ平易な文で練習できるように配慮しましたので、完全理解を望みます。

次の《発展演習》は、前記事項を発展させ、応用力を養うように配慮した問題です。難易とりまぜて問題が配置してありますので、あきらめず最後まで解いてみてください。

《それゆけ単語》は、見開き二ページ内にある重要単語です。それぞれ番号を付し、巻末の62・63ページにまとめて意味を記しましたので、重要単語の整理としても活用してください。

解答欄は特に設けてありませんが、記入する余白をじゅうぶんにとってあります。書くことによって、より正確で、豊かな古文解釈力を身につけるよう望んでやみません。

目次

一　省略語法に慣れる……四
1 助詞の省略　2 体言や「の」の省略
3 主語の省略　4 述語の省略

二　係り結びに注意する……六
1 係り結びのきまり　2 結びの語の省略
3 結びの消去

三　主な助動詞・助詞の解釈……一〇
1 打消か完了か　2 推量か意志か
3 断定か伝聞・推定か　4 過去か詠嘆か
5 断定か完了か　6 現在推量か過去推量か
7 過去か強意か　8 完了か禁止か感動か
9 仮定条件か確定条件か　10 希望か疑問か
11 類推か添加か　12 主格か同格か

四　相関語句の意味……二六
1 仮想か意志か　2 「全然」か「それほど」か
3 疑問か反語か願望か　4 強い禁止か弱い禁止か

五　文の流れの把握……三四
1 誰がどうするのか　2 どんなふうにするのか
3 どことどこが並ぶか　4 どこを飛びこえるか
5 どこがおしゃべりか　6 どこを指すか

六　敬語の理解……四四
1 尊敬か謙譲か丁寧か　2 どんな敬語があるか
3 誰を敬っているか　4 尊敬か使役か
5 尊敬か謙譲か　6 一語か二語か

七　和歌・俳句の技法を知る……五六
1 和歌によく用いられる修辞技巧
2 俳句によく用いられる技法
3 和歌・俳句ともに用いられる技法

《それゆけ単語》整理……六二

〔一〕省略語法に慣れる

口語文でも「あなた、古文好き？」などというように、「は・が（を）ですか」を省略して言うことがあるが、古文では、このような省略語法がきわめて多い。読み慣れるとそれほど気にならなくなってくるので、できるだけ古文を多く読むとよい。次にいくつかの省略語法をあげておく。

1 助詞の省略

口語の「は・が・を」などに当たる語が省略されるもの。

花　咲く。　〈花が咲く。〉

魚釣る人。　〈魚を釣る人。〉

2 体言や体言に準ずる「の」の省略

連体形の次にくる「とき・ところ・こと・もの」や「の」が省略されるもの。

雨降るに出で行く。

〈雨が降るときに出て行く。〉

雨降るはさびし。

〈雨が降るのはさびしい。〉

《基本練習》 1 次の文の口語訳の《　》に、適する語句を入れなさい。

① 風強ければ、船出ださず。

＝風《　　》強いので、船《　　》出さない。

② 月のおもしろきに、歌詠むべし。

＝月が趣深い《　　》に、歌《　　》詠むのがよい。

③ 桜の枝の大きなる、持ち来たり。

＝桜の枝の大きい《　　》持って来た。

④ 桜の花は、一重なる、いとよし。

＝桜の花は、一重な《　　》最高だ。

⑤ 雲はやし。風吹きぬべし。また、雨も。

＝雲の動き《　　》速い。風《　　》吹きそうだ。その上、雨も《　　》。

⑥ 名月や池をめぐりて夜もすがら

＝名月の美しい晩である。一晩中、《　　》池をめぐって歩いたことだ。

▼なお1 2が同時に用いられることも多い。

梅の白き、咲けり。

〈梅の白いのが咲いている。〉

3 主語の省略

これは特に注意を要する。古文では、いちいち主語を明らかに記さないことが多い。前後の文意から判断すること。極端な例をあげると、のみと言はば槌。

〈人がのみを持って来いと言ったら、おまえは槌を持って行け。〉

4 述語の省略

句が対になっていたり、前後に同じような語句が並んでいたり、会話文であったりすると、述語に当たる語句を省略することがある。前後の脈絡をよく考えて判断すること。

絵は父、字はわれ書く。

〈絵は父が書き、字は私が書く。〉

▼3の「のみと言はば……」の例にもある。

5 係り結びの「結びの語」の省略（p7参照）

2 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

降るものは、雪。みぞれはにくけれど、雪のま白にてまじりたる、をかし。雪は、檜皮ぶき（ヒノキの皮を厚く重ねてふいた屋根）、いとめでたし。少し消えがたになりたるほど、また、いと多うは降らぬが、かはらの目ごとに入りて、黒うま白に見えたる、いとをかし。（枕）

① 傍線A～Cを口語訳するとき、次の空欄にどのような語句を補ったらよいですか。（□は助詞、□は述語）

A　降るものとしては、雪□□□。

B　まじっている□、趣深いものだ。

C　檜皮ぶきの屋根□□□□、とてもすばらしい。

② 「降らぬが」の「が」と同じ意味を表しているのは、次のどれですか。

ア　にくけれど　　イ　雪のま白にて　　ウ　雪は

③ 「黒うま白に見えたる」の主語として、どれが正しいですか。

ア　雪まじりのみぞれ

イ　檜皮ぶきに降った雪

ウ　すこし消えがたの雪

エ　あまり多くは降らない雪

《それゆけ単語》

1 おもしろし
2 よし
3 をかし
4 めでたし

〔二〕係り結びに注意する

1 係り結びのきまり

古文では、文の途中に「ぞ・なむ（ん）・や・か・こそ」（係りの語）があると、文末の活用語を、次のように特別な結び方にする。

ぞ・なむ（ん）〈強意〉
や・か〈疑問・反語〉 ―**連体形**で結ぶ。
こそ〈強意〉――→**已然形**で結ぶ。

▼已然形とは、活用語の第五活用形をいう。

川ぞ流るる。　川なむ流るる。
川や流るる。　いづれの川か流るる。
川こそ流るれ。

▼結びの語は、一品詞で答える。

花なむ咲きける。　花ぞ咲ける。

▼「ぞ・なむ（ん）・こそ」は、強意を表すので口語訳しなくてよい。

花　咲く。　花ぞ咲く。
花こそ咲け。　＝花ガ咲ク。

「花咲け。」の場合は、命令形なので、「花ヨ咲ケ。」のように命令の意がある。

▼「や・か」は、口語訳しなければならない。

《基本練習》 **1** 次の文中の係り結びを、――→――印で示しなさい。

① 日なむ暮るる。　② 鳥ぞ飛びける。
③ たれかある。　④ いづれの花かあはれなる。
⑤ 秋こそかなしけれ。　⑥ 山里なむわびしきや。
⑦ 人々なむ、花散りけりと惜しみける。
⑧ 人々、花なむ散りけるといひけり。

2 係り結びに注意して、傍線部を口語訳しなさい。

① もと光る竹なむ一筋ありける。
② 浅き瀬にこそあだ波は立て。
③ いづれの山か天に近き。
④ かの山に花や咲くらむ。いかで見に行かばや。

《それゆけ単語》

5 あはれなり
6 いかで
7 憂し
8 ののしる
9 いらふ

①疑問＝……カ・……ノダロウカ
②反語＝……ダロウカ、イヤ……ナイ

▼「やは・かは」も「や・か」と同じ意。

2 結びの語の省略

前後の文意から結びの語がなくてもわかるとき、これを省略することがある。特に、「いふ・ある・あれ・あらむ・あらめ」などは多く省略される。

花咲くとなむ（いふ）。
心すべきことにこそ（あれ）。
知らぬにや（あらむ）。

3 結びの消去（結びの流れ）

係りの語を受ける活用語があっても、その活用語のところで文が終わらないとき、結びの働きが消去することがある。

花なむ散りける。〈係り結び〉
花なむ散りければ……。〈結びの消去〉

▼「なむ」の結びは「けれ」のところで消去した（流れた）、という。

⑤ 近き火などに逃ぐる人は、「しばし。」とやはいふ。
⑥ 世の中は昔よりかは憂かりけん　わが身ひとつのためになれるか

3 次の文中の係り結びについて、説明しなさい。

① 人々なむ別れがたく思ひて、しきりにとかくしつつののしるうちに夜ふけぬ。
② 仮の宿り、たがためにか心を悩まし、何によりてか目を喜ばしむる。
③ たとひ耳鼻こそ切れ失すとも、命ばかりはなどか生きざらむ。
④ 暗けれど主（ぬし）を知りて飛びつきたりけるとぞ。
⑤ 昔物語を聞きても、このごろの人の家の、そこほどにてぞありけんとおぼえ、人も、今見る人の中に思ひよそへらるるは、たれもかくおぼゆるにや。（徒然）
⑥ ほかより来たる者などぞ、「殿は何にかならせたまひたる。」など問ふに、いらへには、「何の前司（ぜんじ）にこそは。」などぞ必ずいらふる。（枕）

《発展演習》 1 「にやあらむ」「にかあらむ」は、よく用いられる形です。「……デアロウカ」と口語訳します。（「あらむ」が省略されて「にや」「にか」という文も多い。）次の傍線部を口語訳しなさい。

① われらが心に念々のほしきままに来たり浮かぶも、心といふもののなきにやあらん。（徒然）

② 木立いとよしあるは、何人の住むにか。（源氏）

③ 人の心を動かし、慎みを負ふ積もりにやありけむ。（源氏）

2 「もぞ＋連体形」「もこそ＋已然形」は、「……タラ困ル・……タラ大変ダ」という不安や懸念を表します。次の傍線部を口語訳しなさい。

① 門よくさしてよ。雨もぞ降る。（徒然）

② なほ誤りもこそあれとあやしむ人あり。（徒然）

3 文の途中にある「こそ……已然形、……」は、「……ガ……ケレドモ」というように、逆接の意が加わります。次の傍線部を口語訳しなさい。

① 八重むぐら茂れる宿のさびしきに人こそ見えね秋は来にけり（拾遺）

② 須磨は、昔こそ人の住み家などもありけれ、今はいと里ばなれ心すごくて……。（源氏）

4 次の文章は、人の死んだあとの悲しみを述べた一節です。後の問いに答えなさい。

思ひいでてしのぶ人あらんほどこそあらめ、a そもまたほどなく失せて、聞き伝へるばかりの末々は、あはれとやは思ふ。さるは、跡とふわざも絶えぬれば、いづれの人と名をだに知らず、A 年々の春の草のみぞ、心あらん人はあはれと見るべきを、果ては、嵐にむせびし松も千年を待たで薪に砕かれ、古き墳はすかれて田となりぬ。b その形だに B なくなりぬるぞ悲しき。（徒然）

末々―子孫の人たち。
さるは―そうなると。
跡とふわざ―死後の法事。
心あらん人―情を解する人。
墳―墓。

① 傍線①の部分を「こそ……め」に留意して口語訳しなさい。

② 傍線②の「あはれとやは思ふ」の口語訳として、次のどれが正しいですか。
ア しみじみと感慨深く思うだろう。　イ しみじみと感慨深く思うだろうか、いや思うはずがない。
ウ かわいそうだと思わないはずはない。　エ かわいそうだと思わないかもしれない。

③ 傍線A・Bの部分の「ぞ」の結びについて説明しなさい。

④ 二重傍線a・bの「そ」は、それぞれ何を指していますか。

⑤ 二重傍線の「名」とは、何の名ですか。次から正しいものを選びなさい。
ア 跡とふわざをする人の名　イ 思ひいでてしのぶ人の名
ウ 墓の主の名　エ 聞き伝える程度の子孫たちの名

《それゆけ単語》
10 よしあり
5 あはれ
11 心あり